

〈研究ノート〉

ヤナギに関する一考察

—アイヌの丸木舟に用いるヤナギの樹種の同定とその学名について—

本 田 優 子

目次 はじめに

- I 丸木舟の材料としてのバッコヤナギについて
- II 『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』の記述について
 - (1) マルバノバッコヤナギ
 - (2) カラフトオオバヤナギとトカチヤナギ

おわりに

キーワード：アイヌの丸木舟、丸木舟の材料、ヤナギ、植物分類学

はじめに

筆者は、昨年度、アイヌの丸木舟のなかでも特にハリギリを材料とするものについて、異なるジャンルの資料を用いつつ検討を試みた⁽¹⁾。ところが、その作業の一環として丸木舟の材料となる樹種を確認する過程で、沙流川流域でカツラとともに代表的な舟材として利用されているバッコヤナギが、植物学上のバッコヤナギとはたして同一のものなのかという疑問が生じてきた。北海道に自生しているバッコヤナギは直径60cm程度にしか生育しないため、大型の丸木舟を造ることは不可能ではないかと考えたからである。この点に関しては、北海道立林業試験場からも同様の指摘とともに、オオバヤナギではないかという意見をいただいた。以来、同定のための努力を行なったが、諸々の条件から昨年度中には果たすことができず、今年度解決すべき課題として残された。

そこで本稿では、まず、これまでバッコヤナギについての理解が様々に混乱していた事実を示したうえで、バッコヤナギの丸木舟について筆者なりの結論を示すことにする。

さらに筆者はこれまでそのような基本的な検証作業が行われてこなかった一つの原因が、知里真志保の『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』⁽²⁾（以下『植物篇』と略す）にあるのではないかと考えた。そこで、関連する数種類のヤナギについての記述を検討したうえで、知里の植物研究が近代

(1) 本田優子「ハリギリの丸木舟 民族誌資料／考古資料／口承文芸資料にもとづく一考察」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第4号』、北海道立アイヌ民族文化研究センター、1998年。

(2) 知里真志保『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』、日本常民文化研究所、1953年。

の植物系統分類学とどのように関わってきたのかについて論じることとする。

I 丸木舟の材料としてのバッコヤナギについて

アイヌの丸木舟の材料としてバッコヤナギが称揚される事実については、すでに犬飼哲夫が平取地方を例に挙げて紹介している。

「昔は平取地方には到る所にカツラ、ヤチダモの良材があったから、最も普通に丸木舟に使用された。然しバッコヤナギ(ツूसス)があればその舟は軽く、陽割れすることがなく最高品であるが、丸木舟にするほどの大木は極めて稀にしかなかった」⁽³⁾

また、萱野茂(平取町二風谷)も次のように述べている。

「舟を造るのにもっともよい木はばっこ柳で、その次がかつらの木です」⁽⁴⁾

しかし、バッコヤナギを材料とする丸木舟の存在は、筆者の調査の限りでは記録されていない。例えば、現存する丸木舟について調査した難波琢雄「アイヌ丸木舟の地方型」⁽⁵⁾や由良勇の『北海道の丸木舟』⁽⁶⁾などのデータの中には、バッコヤナギの丸木舟は存在せず、考古学の発掘資料の中にも今のところヤナギを材料とした丸木舟は出現していない⁽⁷⁾。

ところが近年、カツラの巨木が入手困難になるにつれ、バッコヤナギで丸木舟を造るケースが増えてきている。例えば1997年の夏には、平取町二風谷において、沙流川支流のウエンザル川流域で伐り出されたバッコヤナギ(長さ8.85m、直径1.20m)を材料として丸木舟が造られたことが写真付きで報道されている⁽⁸⁾。

しかしすでに述べたように、ヤナギ科ヤナギ属のバッコヤナギ(=ヤマネコヤナギ) *Salix bakko Kimura* という植物名を持つヤナギは、アイヌの丸木舟の材料となるほど太くはならない。『北海道主要樹木図譜』には、「喬木ニシテ高サ五十尺、直径二尺ニ達ス」⁽⁹⁾と記されているが、せいぜい30~40cmどまりだとの指摘⁽¹⁰⁾もあり、直径1mにまでは決して成長しない。

そこで筆者は、地元でバッコヤナギと呼ばれているヤナギの正式な名称を把握するために、1998年に造られた丸木舟の原木⁽¹¹⁾の枝を入手し、北海道立林業試験場に同定を依頼した。その結果、枝や葉の形状から、オオバヤナギ属のオオバヤナギ *Toisusu urbaniana* (Seemen) Kimura であることが判明した。オオバヤナギについて『北海道主要樹木図譜』は「喬木ニシテ高サ六十尺、直径二

(3) 犬飼哲夫、竹笠耕三「アイヌの丸木舟の作製」『北方文化研究報告 第1輯』、北海道大学、1936年、P. 179。情報提供者は平取の平村幸雄。なお、アイヌ語名「ツूसス」は、他の文献とも照らしあわせ、「シウースス」の誤りであろうと思われる。

(4) 萱野茂『アイヌの民具』、すざさわ書店、1978年、P. 135。

(5) 難波琢雄「アイヌ丸木舟の地方型」『アイヌ文化 第16号』、アイヌ無形文化伝承保存会、1991年。

(6) 由良勇『北海道の丸木舟』、マルヨン印刷会社、1995年。

(7) 島地謙・伊藤隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』、雄山閣出版、1988年。

(8) 北海道新聞1面、1997年8月12日付。

(9) 宮部金吾、工藤祐舜『北海道主要樹木図譜』、北海道庁、1920~1923年、P. 58。

(10) 辻井達一氏(元北海道大学農学部附属植物園)のご教示による。

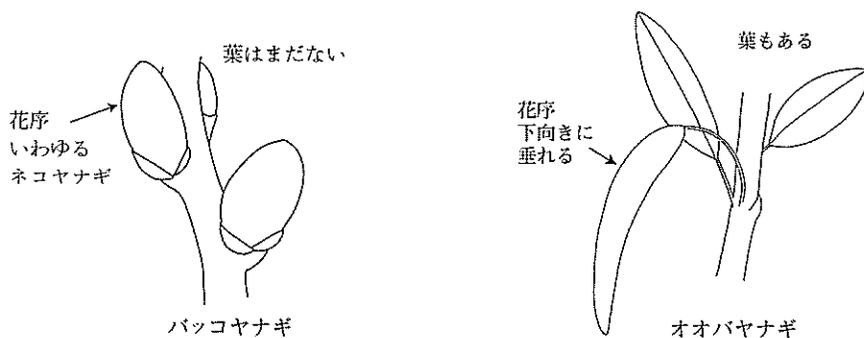
(11) 平取町二風谷在住の貝澤輝一氏が、営林署の許可を得て大雪山中から伐り出したもの。

尺以上ニ達ス」⁽¹²⁾している。

現在、ヤナギ科には4属約350種⁽¹³⁾があるとされる。ただし、雑種や変種が多く出現するという特性があるため、それらを独立した種と認めるか否かは研究者によって説が様々に分かれているのが現状である。したがって種の数さえもいまだにはっきり定まらず、系統分類学上たいへん難しい植物だといわれる。

現段階での4属は以下の通りである⁽¹⁴⁾。1. ヤマナラシ属 *Populus*。2. オオバヤナギ属 *Toisusu*。3. ケショウヤナギ属 *Chosenia*。4. ヤナギ属 *Salix*。

このなかで、オオバヤナギはオオバヤナギ属なのに対し、バッコヤナギはヤナギ属という全く異なる属のヤナギとして分類されている。その理由は、下図に示したように、バッコヤナギとオオバヤナギとでは、花序（花をつける茎の部分の総称）の付き方や形が大きく異なることによる。バッコヤナギの花序は一般にネコヤナギと呼ばれる形をしており、葉に先立って現れる。それに対し、オオバヤナギの花序は葉とともに現れ、長く下垂する。



このような際だった差異がみられるにもかかわらず、なぜオオバヤナギがバッコヤナギと呼ばれるようになったのだろうか。一つには両者は、花序の形こそ異なっても外形や葉の形が比較的よく似ていることから、花が落ちてしまった後では区別が難しくなるという点が考えられる。そのため、オオバヤナギはバッコヤナギと同一のヤナギであり、より大きく成長したものにすぎないと認識されてきたのかもしれない。次章でみる表に示すように、バッコヤナギとオオバヤナギの両方をアイヌ語で「チヌス」(“舟材になった柳”)⁽¹⁵⁾あるいは「シウス」(“にがいがい・柳”)⁽¹⁶⁾と呼

(12) 宮部金吾、工藤祐舜『北海道主要樹木図譜』、北海道庁、1920～1923年、P. 45。

(13) 生物の分類群の階級は、種を基本的な単位として、それより上級に、属、科、目、綱、門などが設けられる。種以下の分類群としては、動物の命名規約では亜種だけが認められているが、植物の場合には亜種のほかに変種、亜変種、品種などの階級も認められている。また、生物名を国際的に確定するために与えられるラテン語表記の名前が学名であり、種名について与えられるだけでなく、すべての階級の生物名について定められるものである。種名は二命名法による。すなわち、属名を名詞形で定め、その属名に種小辞（種小名）を組み合わせることによって個々の種を示している。植物の場合、普通は種名を単位とし、種内分類群を明確にする場合には階級を明らかにした（亜種ssp.とか変種var.とか品種f.を入れた）三命名法をとる。平凡社『大百科事典3』（1984年）の「学名」（岩槻邦男＋上野俊一）、および同『大百科事典13』（1985年）の「分類学」（岩槻邦男）から。

(14) 佐竹義輔、他（編）『日本の野生植物 木本Ⅰ』、平凡社、1989年。

(15) 知里真志保『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』、日本常民文化研究所、1953年、P. 188。

(16) 知里真志保、同上。

ぶケースが多かったことを考えるならば、別種のヤナギとして区別されていなかった可能性は高い。

実は、オオバヤナギのことをバッコヤナギと呼ぶ現象は、平取在住のアイヌの人々だけに限らず、道内の林業関係者に広く共通するようである。更科源蔵の『コタン生物記Ⅰ』のトカチャナギの項には「高さ二十メートルにも達する河岸に自生する巨木である。葉が広く長いのでオオバヤナギともいい、十勝ではこれをバッコヤナギとも呼んでいるという」⁽¹⁷⁾と記されている。また数年前から、木質の柔らかさが評価されて市場に流通している「バッコヤナギのまな板」(上川町産)も、実際にはオオバヤナギを材料としているものである⁽¹⁸⁾。

それゆえ、このように誤解が広がっている原因を探ろうとするならば、日本の近代植物学研究のなかでなぜ「バッコ」という名称がつけられたのか検討し、さらには、その初見がいつ頃ののものなのかを近世以前の日本の本草学等の文献に遡ることも必要になってくる。また、そのような誤解や混同が古くから和人社会にも存在していたものだとするならば、本州以西のどの地方で同じような現象がみられるのかを確認したうえで、和入集団とアイヌ社会の接触過程を時代や地域などを考慮しつつ多面的に把握する必要がある。しかし、これらはいずれも現在の筆者の力の及ぶところではなく、今後の課題とするにとどめたい。

いずれにせよ、以上の点から筆者は、従来、丸木舟の材料として名前があげられていたバッコヤナギは、植物学的にはオオバヤナギをさすものだと結論付けるにいたった。そして、これまで舟材の地方差とみなされてきた点についても再考しなければならないと考えるようになった。たとえば犬飼哲夫の前掲論文を典拠として、同じヤナギのなかでも、八雲地方ではオオバヤナギ⁽¹⁹⁾、平取地方ではバッコヤナギが重用されると考えられてきたが、実際には両方ともオオバヤナギである可能性が高い。なお、オオバヤナギの一変種であるトカチャナギも、外形上ほとんどオオバヤナギとの区別がないので、同じようにバッコヤナギと呼ばれ、丸木舟の材料として用いたと考えられる。

もちろん、本稿において筆者は、地元の人々がオオバヤナギに対してバッコヤナギという名称を用いることを問題視しているわけでは決してない。ある植物に対して地域や個人によって様々な呼称が与えられることはむしろ当然である。筆者が問題だと感じているのは、正式な植物名称での記述が前提となっているような学術研究論文や報告書の中で、アイヌの丸木舟の非常に良質な材料として、バッコヤナギの名称がほとんど検証されないまま記載されている点であり、そのことによつて混乱が増幅されている点である。

Ⅱ 『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』の記述について

(1) マルバノバッコヤナギ

以上のような筆者の結論に対しては、知里真志保の『植物篇』を論拠として、対立する見解が提

(17) 後述するように、現在ではオオバヤナギとトカチャナギは区別されている。

(18) 読売新聞(旭川道北版)、1991年12月21日。北海道立林業試験場より資料を提供していただいた。

(19) 犬飼哲夫、竹笠耕三「アイヌの丸木舟の作製」『北方文化研究報告 第1輯』、北海道大学、1936年、P. 178。

示されるかもしれない。なぜなら、知里は同書のなかでマルバノバッコヤナギ *Salix hultenii* についてかなり詳細に記し、「chipni-susu(chip-ni-su-su)『ちニ・スス』というアイヌ語名について「この木で舟も作つたらしいことわ、その名称から察せられる」⁽²⁰⁾と述べているのである。バッコヤナギとマルバノバッコヤナギが植物学的に大変近い関係のヤナギであろうことは、誰にでも容易に想像できる。それゆえ今日に至るまでバッコヤナギで丸木舟を造るといふ言説に疑問を持つ者が少なかつたのではないだろうか。しかし、この一文を見る限り、知里は実際にマルバノバッコヤナギを材料とした丸木舟の存在を確認しているわけではないように思われ、この記述を典拠としてマルバノバッコヤナギを丸木舟の材料だとすることはできないはずである。

それでは、実際にマルバノバッコヤナギの方は丸木舟の材料となるくらい大きく生育するのだろうか。また、植物学においてマルバノバッコヤナギとバッコヤナギはどのような関係性をもつものとして位置づけられているのだろうか。

1920年代後半にカムチャツカで発見されたマルバノバッコヤナギは、東北帝国大学の木村有香により1934年の「FLORA OF HOKKAIDO AND SAGHALIEN」の中で、日本の植物系統分類学上正式に位置づけられた⁽²¹⁾。木村はその際に、和名の出典として1931年の館脇操の論文を挙げており、管見の限りでは以下の記述がマルバノバッコヤナギの初出である⁽²²⁾。

Salix Hultenii Flod. in Sv. Vet. Ark. Bot. X X. A, n. 6, (1926), P. 51.

和名。まるばのぼつこやなぎ。

産地。台地草原に生ず。南千島に分布す。

幹の直径がわからない以上、丸木舟の材料としての適性を判断することは不可能だが、館脇の報告の中ではバッコヤナギの方が「林野に散在」するのに対し、マルバノバッコヤナギは「台地草原に生ず」とある。一般的に、草原の樹木が林野に生育する近似種の樹木よりも数段大きくなるなどということは考えにくいのではないだろうか。

その後、菅原繁蔵の『樺太植物誌』⁽²³⁾に、1936年に海馬島で採集されたという記録が残っているが、形状等の解説は一切ない。一方で菅原は、マルバノバッコヤナギの変種としてのエゾノバッコヤナギ *Salix hultenii* var. *angustifolia* について「平野にては簇生、多枝灌木状。山麓溪谷に生ずるものは15~16mの喬木となる」と記している。この菅原の記述に拠るならば、マルバノバッコヤナギも一定の条件下では舟材となりうるほどに生育する可能性がないわけではない。

しかし、マルバノバッコヤナギはエゾノバッコヤナギの母種とされているものの、両者の違いは

(20) 知里真志保『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』、日本常民文化研究所、1953年、P. 189。

(21) KINGO MIYABE and YUSHUN KUDO「FLORA OF HOKKAIDO AND SAGHALIEN」『JOURNAL OF FACULTY OF AGRICULTURE, HOKKAIDO IMPERIAL UNIVERSITY, SAPPORO』Vol. X X VI, Parts 1—4, 1934.

(22) 館脇操「千島列島に於ける森林群落生態と樹種の分布に就きて」『札幌農林学会報』第二十二年 第四百号、札幌農林学会、1931年、P. 45。

(23) 菅原繁蔵『樺太植物誌 第2巻』、国書刊行会、1975年、P. 669。

学名にあるようにエゾノバッコヤナギの方が葉が狭いというだけで連続した区分は難しく⁽²⁴⁾、同一のものとする見解もある⁽²⁵⁾。たとえば、大井次三郎の『日本植物誌』⁽²⁶⁾にはエゾノバッコヤナギについての記述はあるがマルバノバッコヤナギはない。

実は、前述の木村有香自身が後年、マルバノバッコヤナギの位置づけについて迷いを感じていた様子が『日本の野生植物 木本Ⅰ』⁽²⁷⁾の記述からうかがえる。彼は、ヤマネコヤナギ(=バッコヤナギ)の項の中に「本種にごく近いもの」としてマルバノバッコヤナギをあげ、前者が「北海道(西南部)・本州(近畿以東)・四国」に分布するのに対し、後者は「北海道、カムチャツカ樺太・南千島」に分布するとしている。エゾノバッコヤナギについては触れられていない。ここから、木村はこの段階でエゾノバッコヤナギとマルバノバッコヤナギを同一のものとするにいたり、しかも、それを種とはみなしていないことがわかる。

すなわち現在では、バッコヤナギとマルバノバッコヤナギの間に大きな生物学上の差異は存在しないという見解が定説となりつつある。それゆえ、たとえ『植物篇』の記述がバッコヤナギではなくマルバノバッコヤナギであっても、やはり舟材として認めることには無理がある。

ところで、この時期にマルバノバッコヤナギの名前を挙げたのは、一人知里真志保だけではない。北海道における近代的植物学の基礎を築いたといわれる宮部金吾もまた、彼の最晩年の論文「アイヌ植物名に就いて」⁽²⁸⁾の中で「マルバノバッコヤナギは、大木になり丸木舟を作るに用ひるからChip-ni-susuと言ふ」と記している。

研究者が持っている植物認識と、植物に関する専門的知識を持たない地元の情報提供者のそれとの間には大きなギャップが存在し、植物学研究の立場からは明らかに異なる植物であっても、一般的には同じものとみなされ同一の名称で呼ばれることが多々ある。豊富なフィールド調査の経験を有する宮部と知里ならば、当然その点は熟知しているはずである。にもかかわらず、両者とも「チブニスス」というアイヌ語を、十分な検証作業を経ることなく特定のヤナギと結び付け、しかもアイヌ語の意味を根拠として、それが丸木舟の材になりうるほど生育するはずだというふうに論を進めている点については、その問題性を指摘せざるをえない。

しかし一方で筆者は、知里が『植物篇』のなかで一般的なバッコヤナギではなくマルバノバッコヤナギという名称で立項していることに注意を払う必要があると考える。当初筆者は、知里もまたオオバヤナギとマルバノバッコヤナギを同一視していたにすぎないのではないかと考えた。しかし、知里の植物学に関する知見はそのような水準のものでは決してなく、マルバノバッコヤナギという複雑な背景を持つヤナギが立項されているのは、彼が1930~40年代の植物系統分類学上の研究動向を敏感に摂取しながら『分類アイヌ語辞典 植物篇』の編纂作業を進めていたことの一つの証左だ

(24) 辻井達一氏よりご教示いただいた。

(25) 辻井達一、梅沢俊、佐藤孝夫『新版 北海道の樹』、北海道大学図書刊行会、1992年、P. 69。

(26) 大井次三郎『日本植物誌 顕花篇 改訂増補新版』、至文堂、1978年。

(27) 佐竹義輔、他(編)『日本の野生植物 木本Ⅰ』、平凡社、1989年、P. 42。

(28) 宮部金吾「アイヌ植物名に就いて」『植物研究雑誌』第二十四巻、津村研究所 植物分類・生薬資源研究会、1949年、P. 4。管見の限り、宮部の最後の著作物である。

ともいえる。

(2) カラフトオオバヤナギとトカチャナギ

同様のことはオオバヤナギに関してもみられる。知里は『植物篇』のなかでオオバヤナギという名称では立項せず、代わりにカラフトオオバヤナギとトカチャナギに関して以下のように記述している。

- § 323. カラフトオオバヤナギ *Toisusu cardiophylla* Kimura
toy-susu 「トイ・スス」 [toy (墓) susu (柳)] 茎 《A十勝・上川》《F樺太》
- § 324. トカチャナギ *Toisusu Urbaniana* Kimura var. *Schneiderii* Kimura

(1) chup-ni 「チュフ・ニ」 [chup (太陽) ni (木)] 茎 《荻伏》

注1. 一もと chip (舟) -ni (木) から来たもの。

(2) chis-ni 「チッ・ニ」 [chis(<chip 舟) ni (木)] 茎 《F樺太》

注2. 一宮部博士わ chishini (悲しみの木, 墓標に用いられる故) として居られるが、当たらず。

このなかで、《A》は宮部金吾・神保小虎『北海道アイヌ語植物名詳表』⁽²⁹⁾、《F》は菅原繁蔵『樺太の植物』⁽³⁰⁾を、それぞれ出典とすることを意味している。

なぜ知里はオオバヤナギではなく、一部の地域に限定され、かつ、下位分類されると思われるような名称のヤナギだけを立項したのだろうか。オオバヤナギとカラフトオオバヤナギ、トカチャナギはどのような関係にあるのだろうか。

また「注2.」は明らかに宮部金吾「アイヌ植物名に就いて」⁽³¹⁾の記述を批判しているものだが、宮部はそのなかでトカチャナギのアイヌ語名を *Toi-susu* または *Chishini* としている。すなわち知里は、宮部がトカチャナギとトイススを対応させていることを知りつつ、あえてカラフトオオバヤナギのアイヌ語名だけをトイススとしているのである。しかもそれを、自らの聞き取り調査ではなく先行研究のデータを引用したものとして述べている。そこにはどのような意図があったのだろうか。

ここで再びヤナギに関する系統分類学の流れを追うことになるが、注意しなければならないのは、研究の進展にともない分類そのものが常に変化してきたという点である。したがって、同一の植物に与えられる学名もまた不変のものではなく、その時代の研究に大きく規定され変化してきた。

(29) 宮部金吾、神保小虎「北海道アイヌ語植物名詳表」『東京地学協会報告』1、1892年。

(30) 菅原繁蔵『樺太の植物』、菅原繁蔵樺太植物研究後援会、1937年。

(31) 宮部金吾「アイヌ植物名に就いて」『植物研究雑誌』第二十四巻、津村研究所 植物分類・生薬資源研究会、1949年。

オオバヤナギ属は当初ヤナギ属の中に含まれていたが、1928年、木村有香によって新属として分類された⁽³²⁾。前章でも述べたように、ヤナギ属は花時に花序が直立または斜上または傾下するのに対してオオバヤナギ属は垂直に下垂すること等、4点が決定的な違いとされた。そして、オオバヤナギ属にはただ1種があるとし、その下位区分としてさらに3つの変種を認めた⁽³³⁾木村の分類に和名および分布を対応させると以下のようになる⁽³⁴⁾。

Toisusu cardiophylla

(var. *cardiophylla*)

var. *schneidii* トカチャナギ アカヤナギ (北海道、本州に分布)

var. *urbaniana* オオバヤナギ (樺太、北海道、本州、九州に分布)

var. *maximowiczii* ヒロハタチャナギ (北海道に分布)

その際の参考文献として木村は宮部金吾の『樺太植物誌』⁽³⁵⁾をあげているが、*Toisusu cardiophylla* (var. *cardiophylla*)はそこで「からふとおほばやなぎ」という新称が与えられたヤナギである。すなわち木村は、4種類のヤナギを、カラフトオオバヤナギに代表させた広義の1種に集約した。知里が『植物篇』のなかでオオバヤナギではなくカラフトオオバヤナギを立項したことには、このような1920年代以降の系統分類学における学說的裏付けがあると考えてよいだろう。

次に、知里がカラフトオオバヤナギに、宮部がトカチャナギに対応させたトイススというアイヌ語名について検討してみたい。知里は1943年の「樺太アイヌ語植物名彙(一) 一白濱に於ける調査(上) 一」⁽³⁶⁾の中では、「トカチャナギの茎」に「トイスス」を対応させていることから、少なくともこの後、系統分類学上の考察を深め、自説を修正したようである。これに対し、宮部はすでに『樺太植物誌』の段階で、「とかちやなぎ」と「トイスス」を結びつけている。しかし、この時初めて新称が与えられた「からふとおほばやなぎ」については対応するアイヌ語名を記していない。

そこで筆者は、この点について考察するため、47~50ページのような表を作成した。アイヌ文化研究のなかではややもすれば見落とされがちな点であるが、北海道における植物学の文献には、アイヌ語が並記されているものが多く、もはや伝承されていないアイヌ語の植物名を探るための有効な資料となる。表はそのような文献のいくつかを年代順に並べたものであり、過去、ヤナギに対してどのようなアイヌ語名と学名が宛てられてきたかを示している。ただし紙面の関係から、このテー

(32) 木村有香「楊柳科ノ一新属 *Toisusu* 及ビソノ分類学上ノ位置」『植物学雑誌』42巻497号、1928年。

(33) 木村の分類およびその解釈については東京都立大学牧野標本館の邑田仁氏にご教示いただいた。

(34) 木村の分類には和名が記されていないので、牧野富太郎、根本莞爾『訂正増補 日本植物総覧』(春陽堂、1931年)の和名及び分布を対応させた。

(35) 宮部金吾、三宅勉『樺太植物誌』、樺太庁、1915年。

(36) 知里真志保「樺太アイヌ語植物名彙(一) 一白濱に於ける調査(上) 一」『樺太庁博物館報告』第五巻一号、樺太庁、1943年。この時期、トカチャナギの学名に彼が何をあてたか興味のあるところだが、「白濱に於ける調査(下)」の予報部分であるため、学名が並記されていない。

マに関連して筆者が重要だと考える文献のみにしぼった。

1892年の①と②は宮部金吾のアイヌ植物関係著作の事実上の出発点だといえる。②の緒言に述べているように、1888年から4年間にわたり北海道および千島列島の調査を行なった神保小虎は、採集した植物標本のアイヌ語名をその地方のアイヌに質し、およそ200を確認した。これに宮部が取捨、識別、学名を加えるなどの植物学的作業を行なって発表したものが①である。さらに同年3月、沙流川流域、鵝川流域、千歳で宮部が行なった調査ならびに、4月に千歳、上川で神保が行なった調査結果を加えて発表したものが②である。この段階でおよそ300の植物に対するアイヌ名が明らかになっている。

この①、②において トイススというアイヌ語名に対応しているのはシカヤナギであり、*Salix cardiophylla* の学名が当てられている。しかしシカヤナギは、③では突然オオバヤナギの別称として位置づけられている。その理由はいまだに不明であるが、この段階でオオバヤナギのアイヌ語名にトイススが加わることになる。

ところが④になると、それまで同一視されていたオオバヤナギとトカチャナギが、子房の毛の有無により、有毛のオオバヤナギと無毛のトカチャナギに分けられるようになった。トイススはトカチャナギの方をさす名称だとみなされた。北海道内に生育する樹木を対象としていることもあり、③で新称として出現したカラフトオオバヤナギについては記されていない。

⑤では、オオバヤナギもトカチャナギも記載されず、カラフトオオバヤナギの記述のみであるが、その学名には④でトカチャナギの学名とされていた *Salix cardiophylla* が宛てられている。アイヌ語はトイススではなくチンニーとなっている。

⑥になると先に述べた木村有香の分類に従い、トカチャナギとカラフトオオバヤナギはオオバヤナギ属に分類されている。しかし学名から判断するならば、菅原はオオバヤナギを種として認め、その変種としてトカチャナギをたてているようである。そしてもう一つの種であるカラフトオオバヤナギのアイヌ語名をトイススとしている。菅原はこの時、種類は多くないが「あいぬ名」「ぎりやーく名」「おろつこ名」の調査を独自におこなっており、直接現地のアイヌから聞き取ったものと思われる。ただし⑦ではトカチャナギにもトイススを対応させている⁽³⁷⁾。

このように見てみると、トイススに対応する日本名は年代によって変化しているが、学名の流れを追ってみるならば、多くの場合 *Salix cardiophylla* と対応していることがわかる。そしてそれは、木村が広義の1種としてたてたカラフトオオバヤナギの系譜につながるものなのである。それゆえ知里があえてトイススをカラフトオオバヤナギに対応させ、宮部とは異なる説を唱えたのは、このような研究史の蓄積をふまえたものと考えられるのではないだろうか。

なお、木村によってオオバヤナギ属が新属として立てられた際、その新しい属名 *Toisusu* は、トイススというアイヌ語を起源として考案された。これは、数多い植物の学名のなかでも今なおアイヌ語に基づく唯一の属名となっている。しかし前述のように、その際に木村が参考にした宮部の

(37) 菅原繁蔵『樺太植物誌 第2巻』の刊行年は1975年だが、原版は1937年に完成しているので、ここでは原版の刊行年に拠った。

『樺太植物誌』には、チブニスス、トイスス (北海道アイヌ名)、チシニ (樺太アイヌ名) の3種類のアイヌ語がオオバヤナギに対応するものとして記載されている。

チブニススの方は、すでに宮部の「アイヌ利用の植物(木材の部)」⁽³⁸⁾にも収録されており、比較的ポピュラーなアイヌ語である。これに対してトイススはその語の持つ意味も難解である。トイは一般的には「土、土地、地面、田畑」等を意味するので、そのまま解釈すれば「土のヤナギ」という意味になる。しかし、派生的には「墓」という意味をも有するため、知里真志保は「toy (墓) susu (柳)」と解釈している⁽³⁹⁾。一方、宮部金吾は「Toi-susu (非常に大きなヤナギ)」⁽⁴⁰⁾と述べている。たしかにトイは「ひどく、すさまじく」という意味をもつ接頭辞でもあるが、主として動詞に接続するものであり、この場合は適当ではない。また、チシニの解釈をめぐって知里と宮部の見解が分かれている点は、すでに述べた通りである。

当初筆者は、チブニススとトイススが両方ともオオバヤナギを意味するアイヌ語名であるにもかかわらず、なぜ木村は意味の解釈さえも統一されていないようなトイススという名称の方を新しい属名として選んだのかと疑問を持った。また、前述のように新属の広義の1種をカラフトオオバヤナギとしたのならば、樺太アイヌ語名に基づいてもよかったのではないかと考えたりもした。たしかに植物学における属名は、ある意味で“名札”にすぎず意味的制約を受けるものではない。ましてやどれがポピュラーであるかというようなことは命名上の規約にならない。けれども、アイヌ語を起源とする唯一の属名であるからこそ、アイヌ文化やアイヌ語研究の成果をふまえた命名を期待するのは筆者一人ではないだろう。しかしその点についても、過去においてカラフトオオバヤナギに対応するアイヌ語の多くがトイススとして記録されていることを確認したことにより、ある程度了解できたように思う。

最後に、以上の点をおさえたうえで、もう一度知里の『植物篇』について考えてみたい。今日『植物篇』に対しては、アイヌ語の記述が間違っている、生活文化に関する叙述が実際の各地の伝承とは異なっている、学名や日本語の植物名が間違っている等、様々な批判的言説を耳にする。しかし、それらのなかには、時代とともに各地の伝承自体が変化していることや、系統分類学の進展にともない学名も含め植物の名称自体が変更されてきたことに原因があったりする場合も多く、批判は慎重であるべきだと筆者は考える。その意味では今日なお、アイヌ文化研究の一領域としての植物研究において『植物篇』ははるかな高みに位置し、それを越えるものは出現していない。

しかし、たとえば今回取り上げたヤナギについて再考してみよう。知里はトイススをカラフトオオバヤナギに対応させ、トカチャナギとは厳密に区別した。ましてや種としてのオオバヤナギを安易にトイススと結びつけるようなことはしていない。つまり『植物篇』にはオオバヤナギが載って

(38) 宮部金吾「アイヌ利用の植物(木材の部)」『恵林』第二号、學藝會、1892年。「アイヌ利用の植物(薬用植物)」(『恵林』第一号、1892年)とともに、宮部がアイヌにかかわる植物について言及した最も古い文献である。

(39) 知里真志保『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』、日本常民文化研究所、1953年、P. 190。

(40) 宮部金吾「アイヌ植物名に就いて」『植物研究雑誌』第二十四巻、津村研究所 植物分類・生薬資源研究会、1949年、P. 4。

いないのではなく、載せていないのだと理解すべきだろう⁽⁴¹⁾。それは彼なりの研究史の把握や植物分類に対する立場に基づいた判断であり、かれの研究水準の高さをうかがわせるものである。その点を筆者は十分認めている。しかしそのうえでやはり初発点に立ち戻らざるをえない。はたして現実はどうだったのか、と。筆者には、地元の情報提供者が、子房の毛の有無を確認してトカチャナギとオオバヤナギを区別していたなどということは考えられないし、カラフトオオバヤナギとオオバヤナギが異なるヤナギだと認識されていたとも思えない。現実には、オオバヤナギ属すべてがトイヌスや、チヌスと呼ばれていたのかもしれない。そして個々の名称の違いは、植物の違いではなく、地方差や個人差だったのかもしれない。当然知里もそのような点は認識していたはずである。しかし、研究に資する質を備えた辞典を編纂しようとする以上、植物学の方法論や系統分類学の成果に基づいて植物を区分し、そこに、現実から抜き出して収集した有限のデータを対応させていかざるをえない。『植物篇』の「間違い」だといわれるものには、そのような作業のなかで必然的に生じてくるギャップが少なからず含まれているのではないだろうか。

それゆえ『植物篇』を利用する人間は、知里の研究の水準やその有効性を再確認するとともに、その資料としての制約性も含めた特性を認識しなければならない。そのためには『植物篇』そのものに対する研究の深化が必要であり、それは個々の記述の検証にとどまらず、同書の成立過程においてどのような分野にどのような研究者が協力助言を行なったのかを確認するということまでも視野にいられた作業でなければならない。そしてさらには、知里がかつて行なったように、過去の植物学の研究史を辿り、その蓄積を自らのものとする努力をまじめに積み重ねることが要求される。筆者自身は、今回の小論をそのための一歩と考えている。

おわりに

本稿の論点をあらためて整理したい。

1. 現在、アイヌの丸木舟の良材として名前が挙げられることの多いバッコヤナギ、あるいはいくつかの文献において丸木舟の材料として紹介されているマルバノバッコヤナギは、おそらくどちらもオオバヤナギあるいはその一変種であるトカチャナギを指していると思われる。筆者は、地元の人々が慣習としてそれらをバッコヤナギと呼ぶことに異を唱えるつもりはないが、学問研究の諸分野でその点に言及する際には、区別を明確にし、植物学上の名称を認識しておく必要があるだろう。

2. 植物のアイヌ語名の同定作業は、一方では研究者と情報提供者との間の植物認識のずれという落とし穴に常に注意をはらわなければならない。もう一方では植物学内部の植物系統分類学における今日的状況をふまえていなければならない。そういう視点から、今回あらためて知里真志保の行

(41) たとえば、秋葉実『植物名一覧—松浦武四郎翁著作より』(北海道出版企画センター、1997年)では、松浦武四郎の記録の中の「水楊トイッシュ」を「おおばやなぎ」だとしているが、すくなくとも『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』は、その典拠にはなりえない。

なった仕事を検証し、マルバノバッコヤナギの同定については、前者の側面で多少問題性を指摘したものの、後者については、彼の植物研究における非妥協的で進取的な研究姿勢に学ぶ点が多かった。知里の仕事は、しばしば行われているように、地元の情報提供者からアイヌ語を聞き取って、一般的な日本語の植物名と対応させたというような類のものとは明らかに次元を異にすることを認識すべきである。

3. また今日、『植物篇』こそがアイヌに関する植物研究の唯一無比の文献であるかのごとく考えられがちであるが、表にも示したように、それ以前の研究も今なお多くの有益な情報をもたらしてくれる。それらを把握することによってはじめて、我々は知里の業績もまた正しく理解することができるのだということを強調したい。

ヤナギに関してなんら知識を持たない筆者が本稿をまとめるにあたり、本当に多くの方々にお世話になった。姉帯正樹氏（北海道立衛生研究所）からは多くの資料を提供していただいた。梅木清氏（北海道立林業試験場）、長坂有氏（北海道立林業試験場）には昨年度に引き続きアドバイスをいただくとともに、オオバヤナギの同定の際にたいへんお世話になった。また、辻井達一氏（元北海道大学農学部附属植物園）、邑田仁氏（都立大学牧野標本館）、高橋英樹氏（北海道大学農学部）からは、文献および植物系統分類学上の本当に丁寧なご指導をいただいた。記して心からお礼申し上げます。

〈参考・引用文献〉

- 秋葉 実『植物名一覽—松浦武四郎翁著作より』、北海道出版企画センター、1997年。
- 犬飼哲夫、竹笠耕三「アイヌの丸木舟の作製」『北方文化研究報告 第1輯』、北海道大学、1936年。
- 大井次三郎『日本植物誌 顕花篇 改訂増補新版』、至文堂、1978年。
- 開拓使（編）『北海道志』、1884年。（歴史図書社、1973年）
- 萱野茂『アイヌの民具』、すずさわ書店、1978年。
- 川上瀧爾（著）、宮部金吾（関）『北海道森林植物図説』、裳華房、1902年。
- 木村有香「楊柳科ノ一新属 Toisusu 及ビソノ分類学上ノ位置」『植物学雑誌』42巻497号、1928年。
- ARIKA KIMURA 「SYMBOLAE ITEOLOGICAE IV」『SCIENCE REPORTS OF THE TOHOKU IMPERIAL UNIVERSITY, Fourth Series, Biology, Vol. XII』No. 2, 1937.
- 工藤祐舜『樺太植物調査書』、薩哈噠軍政部、1924年。
- 佐竹義輔、他（編）『日本の野生植物 木本』、平凡社、1989年。
- 島地 謙・伊藤隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』、雄山閣出版、1988年。
- 下中 弘（編集発行）『大百科事典3』、平凡社、1984年。同『大百科事典13』、平凡社、1985年。
- 神保小虎、宮部金吾「『アイヌ』ト日本語対照北海道植物名一斑」、東京植物学会編輯所、1892年。
- 菅原繁蔵『樺太の植物』、菅原繁蔵樺太植物研究後援会、1937年。
- 同 『樺太植物誌 第2巻』、国書刊行会、1975年。
- 館脇操「千島列島に於ける森林群落生態と樹種の分布に就きて」『札幌農林学会報』第二十二年第四百号、札幌農林学会、1931年。
- 知里真志保「樺太アイヌ語植物名彙（一）—白濱に於ける調査（上）—」『樺太庁博物館報告』第五卷一号、樺太庁、1943年。
- 同 『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』、日本常民文化研究所、1953年。
- 辻井達一、梅沢俊、佐藤孝夫『新版 北海道の樹』、北海道大学図書刊行会、1992年。
- 難波琢雄「アイヌ丸木舟の地方型」『アイヌ文化 第16号』、アイヌ無形文化伝承保存会、1991年。
- JHON BATCHELOR, KINGO MIYABE 「AINU ECONOMIC PLANTS.」『TRANSACTIONS OF THE ASIATIC SOCIETY OF JAPAN』VOL. XX I. R. MEIKLEJOHN, 1893.
- 林弥栄、他（監修）『原色樹木大図鑑』、北隆館、1985年。
- 本田優子「ハリギリの丸木舟 民族誌資料／考古資料／口承文芸資料にもとづく一考察」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第4号』、北海道立アイヌ民族文化研究センター、1998年。
- 牧野富太郎、根本莞爾『訂正増補 日本植物総覧』、春陽堂、1931年
- 宮部金吾「アイヌ利用の植物（木材の部）」『恵林』第二号、學藝會、1892年。
- 同 「北海道有用植物説明」『北海之殖産』第38号、勤農協會、1893年。

同 「アイヌ植物名に就いて」『植物研究雑誌』第二十四卷、津村研究所 植物分類・生薬資源研究会、1949年。

宮部金吾、工藤祐舜『北海道主要樹木図譜』、北海道庁、1920～1923年。

KINGO MIYABE and YUSHUN KUDO 「FLORA OF HOKKAIDO AND SAGHALIEN」『JOURNAL OF FACULTY OF AGRICULTURE, HOKKAIDO IMPERIAL UNIVERSITY, SAPPORO』 Vol. XXVI, Parts 1—4, 1934.

宮部金吾、神保小虎「北海道アイヌ語植物名詳表」『東京地学協会報告』1、1892年。

宮部金吾、三宅勉『樺太植物調査概報』、樺太民政署、1907年。

同 『樺太植物誌』、樺太庁、1915年。

宮部金吾博士記念出版刊行会編『宮部金吾』、宮部金吾博士記念出版刊行会、1953年。

日本植物学会編『植物学選集 宮部金吾博士九十賀記念』、養賢堂、1950年。

由良 勇『北海道の丸木舟』、マルヨシ印刷会社、1995年。

	①「アイヌ」ト日本語対照北海道植物名一斑 神保小虎、宮部金吾1892 (M25) / 4	②北海道アイヌ語植物名詳表 宮部金吾、神保小虎 1892 (M25) / 6
バッコヤナギ	ヤマネコヤナギ 〈 <i>Salix Caprea</i> , L.〉 Chipnisusu (十、等) Meraomani (天、等)	ヤマネコヤナギ。 バッコヤナギ (方言) 〈 <i>Salix caprea</i> , L.〉 Chipni-susu (十) Meraomani (天) Tushni-susu (沙) Shiu-susu (千、有)
オオバヤナギ	オホバヤナギ 〈 <i>Salix subfragilis</i> , Anders.〉 Chipnisusu (十、等) Shisusu (十、等)	オホバヤナギ 〈 <i>Salix subfragilis</i> , Anders.〉 Chipni-susu (沙、十、石) Shiu-susu (十)
シカヤナギ	シカヤナギ 〈 <i>Salix cardiophylla</i> , Trautv. et Mey.〉 Toisusu (十、等)	シカヤナギ 〈 <i>Salix cardiophylla</i> , Trautv. et Mey.〉 Toi-susu (十、石上)
エゾヤナギ	エゾヤナギ 〈 <i>Salix acutifolia</i> , Willd.〉 Shisusu (十、等)	エゾヤナギ 〈 <i>Salix acutifolia</i> , Willd.〉 Shiu-susu (沙、十)
ナガバヤナギ	ナガバヤナギ 〈 <i>Salix stipularis</i> , Sm.〉 Shisusu (十、等)	ナガバヤナギ 〈 <i>Salix stipularis</i> , Sm.〉 Shiu-susu (十) Yayai-susu (鷓)
キヌヤナギ	キヌヤナギ 〈 <i>Salix viminalis</i> , L.〉 Petsusu (十、等) Yayaisusu (十、等)	キヌヤナギ 〈 <i>Salix viminalis</i> , L.〉 Pet-susu (沙、十、石上) Yayai-susu (十、千、石上)
コリヤナギ		コリヤナギ 〈 <i>Salix multinervis</i> , Fr. et Sav.〉 Ura-susu (沙、鷓、千石) Urai-susu (有)
エゾノクロヤナギ	エゾノクロヤナギ 〈 <i>Salix</i> sp.〉 Rambara (十、等)	エゾノクロヤナギ 〈 <i>Salix</i> sp.〉 Rambara (十、石上)
イノウヤナギ	イノウヤナギ 〈 <i>Salix</i> sp.〉 Inaonishusu (十、等)	イノウヤナギ 〈 <i>Salix</i> sp.〉 Inauni-susu (十、石上)
カタヤナギ	カタヤナギ 〈 <i>Salix</i> sp.〉 Shitushikoro (十、等)	カタヤナギ 〈 <i>Salix</i> sp.〉 Shitushikoro (十、石上)
ドロヤナギ	ドロヤナギ 〈 <i>Populus suaveolens</i> , Fisch.〉 Yaini (沙、鷓川等) Kurunni (十、等)	デロ。ドロ 〈 <i>Populus suaveolens</i> , Fisch.〉 Kurunni (十、石) Yaini (沙、鷓、千、有)
ハコヤナギ	ハコヤナギ 〈 <i>Populus tremula</i> , L.〉 Nupkurunni (十) 又ハ Kurunni.	ハコヤナギ 〈 <i>Populus tremula</i> , L. var. <i>villosa</i> , Wesm.〉 Nup-kurunni (十、沙、石) Yaini (千) Kurunni

	③樺太植物誌 宮部金吾、三宅勉 1915 (T 4)	④北海道主要樹木図譜 宮部金吾、工藤祐舜 1920 (T 9)
バツコヤナギ	ばつこやなぎ。やまやなぎ。さるやなぎ。 〈Salix Caprea L.〉 シュースス。メララマニ (北海道アイヌ名)。 メネマニ (樺太アイヌ名)。	○ばつこやなぎ。さるやなぎ。 やまやなぎ。やまねこやなぎ 〈Salix Caprea L.〉 シュースス。チツプニスス。 メラオマニ。ツシュニスス。
オオバヤナギ	おほばやなぎ。あかやなぎ。 えぞのおほばやなぎ。とかちやなぎ。 しかやなぎ。 〈Salix Urbaniana v. Seem.〉 チブニスス。トイスス (北海道アイヌ名)。 チシニ (樺太アイヌ名)。	○とかちやなぎ 〈Salix Urbaniana V. Seem. var. Schneiderii Miyabe et Kudo.〉 おほばやなぎ。あかやなぎ。 〈Salix Urbaniana v. Seem.〉 とかちやなぎ。しかやなぎ。おほばやなぎ。 ばつこやなぎ (十勝方言)。 〈var. Schneiderii Miyabe et Kudo, nom. nov.〉 〈Salix cardiophylla Tokubuchi,〉 ちぶにすす。といすす。
シカヤナギ	からふとおほばやなぎ (新称)。 〈Salix cardiophylla Trautv. et Wey.〉 からふとくろやなぎ (新称)。 〈Salix macrolepis Turcz.〉	
エゾヤナギ	えぞやなぎ 〈Salix daphnoides Vill.〉 シュースス (アイヌ名)。	○えぞやなぎ 〈Salix rorida lacks.〉 シュースス
ナガバヤナギ	ながばやなぎ。をのえやなぎ。 〈Salix opaca Anders.〉 シュースス (アイヌ名)。	○ながばやなぎ。をのえやなぎ。 からふとやなぎ。こながばやなぎ。 〈Salix sachalinensis Fr. Schm.〉 シュースス。ヤヤイスス。
キシヤナギ	きぬやなぎ 〈Salix viminalis L.〉 ベツトスス。ヤヤイスス (アイヌ名)。	○きぬやなぎ 〈Salix viminalis L. var. yezoensis C. K. Schm.〉 ベツトスス。ヤヤイスス。
コリヤナギ		
エゾノクロヤナギ		
イノウヤナギ		
カタヤナギ		
ドロヤナギ	どろやなぎ。でろ。ほとけぎ。きわた。 わたのき。 〈Populus suaveolens Fisch.〉 ヤイニー。クルンニー (北海道アイヌ名)。 オコチニー。タムカバラニー (樺太アイヌ名)	○どろのき。どろやなぎ。わたどろ。 わたのき。ほとけぎ。 〈Populus Maximowiczii A. Henry.〉 やいに。くるんに。
ハコヤナギ	やまならし。はこやなぎ。やまどろ。 まるばやなぎ。 〈Populus Sieboldii Miq.〉 ヌツプタルンニー (北海道アイヌ名)。 ヤイニー (樺太アイヌ名)。 その他：はいいろやなぎ (新称)、たらいか やなぎ (新称)、からふとやなぎ、ちしまやなぎ	○やまならし。はこやなぎ。やまどろ。 あをどろ。 〈Populus Sieboldii Miq.〉 ぬつぶくるんに。 *その他：しろやなぎ、えぞかはやなぎ、 注：○は図版に記された名称

	⑤北樺太植物調査書 工藤祐舜 1924 (T13)	⑥樺太の植物 菅原繁蔵 1937 (S12)
バツコヤナギ	ばっこやなぎ。やまやなぎ。さるやなぎ。 <Salix Caprea L.> メネマニ、メララマニ、シユースス	マルバノバツコヤナギ <S. Hultenii Floderus in Arkiv. f. Bot> エゾノバツコヤナギ、エゾノヤマネコヤナギ <var. angustifolia>
オオバヤナギ	からふとおおばやなぎ <Salix cardiophylla Trautv. et Mey.> チシニ	トカチヤナギ <Toisusu Urbaniana Kimura var. Schneiderii Kimura> チスツニ (あいぬ名) カラフトオオバヤナギ <Toisusu cardiophylla Kimura in T. B. M.> トイスス (あいぬ名)
エゾヤナギ	えぞやなぎ <Salix rorida Lacks.> シユースス	エゾヤナギ <S. Lackschewitziana Toeffler>
ナガバヤナギ	ながばやなぎ。をのえやなぎ。 からふとやなぎ。こながばやなぎ。 <Salix sachalinensis Fr. Schm.> シユースス	カラフトヤナギ、ナガバヤナギ、 ヲノエヤナギ、 <Salix sachalinensis Fr. Schm Fl.> エゾノキヌヤナギ <Salix yezoensis Kimura> スス (あいぬ名)
キヌヤナギ	きぬやなぎ <Salix Viminalis L. var. yezoensis C. K. Schn.> ベットスス、ヤイスス ほそばきぬやなぎ <Salix Viminalis L.>	ホソバキヌヤナギ <S. yezoensis Kimura Var. angustifolia>
エゾノクロヤナギ	からふとくろやなぎ	
イノウヤナギ		
カタヤナギ		
ドロヤナギ	どろのき。どろやなぎ。わたどろ。 わたのき。ほとけぎ。 <Populus Maximowiczii A. Henry> オコチニ、タムカバラニ、ヤイニ、 クルニ	ドロヤナギ ドロノキ デロ <P. Maximowiczii A. Henry in Gard.> クルニ (あいぬ名)
ハコヤナギ	からふとやまならし (新称) <Populus tremula var. Davidiana> ヤイニ *その他：たらいかやなぎ、やちまめやなぎ、 はいろやなぎ、ぬまいぬやなぎ、けこばな やなぎ	テウセンヤマナラン カラフトヤマナラン <Populus Davidiana Dode> メレママ (あいぬ名) (ヤチヤナギ、エゾヤマモモ) <Myrica tomentosa> マキランパニ (あいぬ名) *その他：和名のみ21種

	⑦樺太植物誌第2巻 菅原繁蔵 1937 (S12)	⑧分類アイヌ語辞典植物篇 知里真志保1953 (S28) 地名省略、舎部分名称
バツコヤナギ	マルバノバツコヤナギ <Salix Hultenii> エゾノバツコヤナギ、エゾノヤマネコヤナギ <Salix Hultenii var. angustifolia>	マルバノバツコヤナギ <Salix Hultenii Flod.> ちツニ・スス、ちツ・スス、メろマイ、 メらオマニ、メれマイ、メねマイ、メねマニ ぬツカカ・スス、し・スス、しウ・スス、 スす・アツ、スす・カハ、あハ・スス、 どシニ・スス
オオバヤナギ	トカチヤナギ <Toisusu Urbaniana KIMURA> var. Schneiderii KIMURA> トイスス (あいぬ名) カラフトオオバヤナギ <Toisusu cardiophylla KIMURA> トイスス、チスツニ (あいぬ名)	トカチヤナギ <Toisusu Urbaniana Kimura var. Schneiderii Kimura> ちユツニ、ちジニ カラフトオオバヤナギ <Toisusu Cardiophylla Kimura> とイスス
エゾヤナギ	エゾヤナギ <Salix Lackschewitziana TOEPFFER> スス (あいぬ名)	
ナガバヤナギ	カラフトヤナギ、ナガバヤナギ、 ヲノヘヤナギ、ヤブヤナギ <Salix sachalinensis Fr. SCHM> スス (あいぬ名)	ナガバヤナギ <Salix sachalinensis Fr. Schm.> スす、ヤヤイ・スス、イナウニ・スス、 しウ・スス、スすノンボノンボ、スす・ボ スす・チョ・チョ、に・セタ
キスヤナギ	エゾノキスヤナギ <Salix yezoensis KIMURA> スス (あいぬ名)	
コリヤナギ	ホソバノキスヤナギ <Salix yezoensis var. angustifolia KIMURA>	イスコリヤナギ <Salix integra Thunb.> ウライ・スス、ウラ・スス、フラ・スス、 シどシ・コル
ドロヤナギ	ドロヤナギ、ワタドロ、ドロノキ、 ドロ、デロ <Populus Maximowiczii A. HENRY in Gard> クルニ (あいぬ名)	デロ ドロノキ <Populus Maximowiczii Henry> ヤイ・ニ、ちシ・ニ、クルニ、クルンニ、 ベトルン・クルニ、ラむ・カバラ
ハコヤナギ	カラフトヤマナラシ、 テウセンヤマナラシ <Populus Davidiana DODE in Mem.> メレマニ (あいぬ名)	ヤマナラシ ハコヤナギ <populus Sieboldii Miq.> クルニ、ぬツ・クルンニ、ヤイニ チョオセンヤマナラシ <Populus Davidiana Dode> メねマニ、メねマイ、メれマイ
(ヤチヤナギ)	(ヤチヤナギ) <Myrica tomentosa> マキランバニ (あいぬ名) *その他：和名のみ26種	

A Note on Willows

— on Identification of the Willows for Ainu Dugouts and their Botanical Names.

HONDA Yuko

Summary :

Last year, a study was conducted on Ainu dugouts made of *Kalopanax* by the author. Through this study, a question arose if *Bakko yanagi*, which is often cited as a material highly suitable for Ainu dugouts, might be of a different species than *Bakko yanagi* (*Salix-bakko* Kimura) in terms of botanical classification.

Therefore, in 1998, branches of the tree used in producing dugouts in Nibutani in Biratori, Hokkaido, were taken to the Hokkaido Forestry Research Institute for identification. As a result, the tree was identified as *Ooba-yanagi* (*Toisusu urbaniana* (Seemen) Kimura). The author does not object to the local custom of calling the tree *Bakko yanagi*. When referring to these trees in academic studies, however, it is necessary to clearly distinguish them and call them by their botanical names.

Based on the assumption that this confusion might be caused by a description in *the Bun-ruui Ainugo Jiten Dai-1kan Shokubutsuhen* (Classified Dictionary of the Ainu, Vol. 1: Plants), authored by Mashiho Chiri, the descriptions of willows in the book were examined. As a result, it was found that although his studies contained problems to some degree, Chiri conducted his research carefully while considering and incorporating developments in modern systematic botany.

Key Words : Ainu dugouts, material for making dugouts, willow, systematic botany